

斜張橋形式の連続合成析について

大阪工業大学 正員 赤尾 観助

△ 学生員 ○ 桜本 正治

栗本鉄工所 正員 村田 広治

1. まえがき

連続合成析のプレストレス法の一つとして、PCケーブルを用いる方法があるが、このPCケーブルを桁の外に出し、斜張橋形式とすればケーブル張力は大きく偏心して作用するため、プレストレス力は比較的小さくて省み、同時に斜張橋系としての断面力の減少が期待できる利点がある。このような形式に関して2, 3の考察を行つたので報告する。

2. 構造および施工方法

従来の連続合成析に対して、塔、ケーブルおよびケーブル定着部が追加されることがあるが、PCにおける手法を活用して、できるだけ構造の複雑化をさけるとのとする。^{*1}

プレストレスの導入を含む施工方法としては、種々の方法が考案されるが図1-a) のように先づPCケーブルを配置する区間の床版コンクリートを打設し、養生後ケーブルを緊張して斜張橋系とする方法が可能性が高いようと思われる。この場合、同図b) のように、中央スパンに仮ヒンジを設けられれば、プレストレス導入は静定の張出軸に対して行なえることになり、正モーメント領域の鋼断面に対してはPSがきかないが、中間支点域の床版のPSに対しては有利となる。

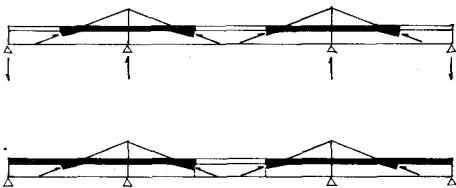


図-1

3. 床版コンクリート内のプレストレス応力の分布

この構造形式では、プレストレスは主桁位置において集中的に導入されるから、床版内にPC鋼材を分散配置する場合と異なり、床版内のプレストレス応力の分布状態が、特に中負の異なる場合などには問題となると考えられる。床版を主桁上縁で結合された平板と考え、これを交叉格子とみなしてその軸方向度数uを固有関数に展開すれば、次のようであらわされる。^{*2}

$$U = \sum \alpha_i \psi_i(x) \psi_i(y) \cdot Q_i \quad (1)$$

ここで

$\psi_i(x) = \cos \frac{i\pi x}{L}$, $\alpha_i = 1 / (\int_0^L \psi_i^2 dx) = \frac{2}{L}$, Q_i は荷重を固有関数に展開したときの係数で、 ψ_i は次の微分式より求められる。

$$EI_y \frac{d^4 u}{dy^4} + C_x^i u = 0 \quad (2)$$

ここに EI_y は横方向への曲げ剛性、 C_x^i は x 方向の固有関数重合相応するバネ常数である。 EI_y を一定とし $A_1^i = C_x^i / EI_y$ とおけば、

$$\psi_i(y) = A_1^i \cosh A_1^i y + A_2^i \sinh A_1^i y + A_3^i \cosh A_1^i y + A_4^i \sinh A_1^i y \quad (3)$$

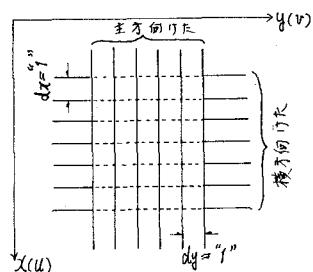
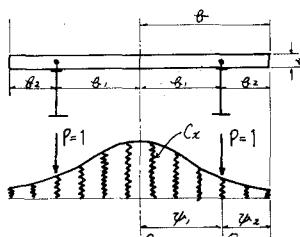


図-2

図 3 のような 2 本主筋の場合を考えると ψ の満たすべき条件としては



$$\left. \begin{aligned} \psi_1(0) &= \psi_1''(0) = 0, & \psi_1(e_1) &= \psi_1(0), & \psi_1(e_2) &= \psi_1'(0) \\ \psi_1''(e_1) &= \psi_2''(0), & \psi_1''(e_1) - \psi_2''(0) &= -1/EIy \\ \psi_2''(e_2) &= \psi_2''(e_2) = 0 \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

(4) を満足する $\psi(y)$ は

$$\left. \begin{aligned} \psi_1 &= (\frac{1}{4} \delta^3 EI_y) (f_1 \cosh \delta y \cdot \cos \delta y + f_2 \sinh \delta y \cdot \sin \delta y) \\ \psi_2 &= (\frac{1}{4} \delta^3 EI_y) (f_3 \cosh \delta y \cdot \cos \delta y + f_4 \sinh \delta y \cdot \sin \delta y) \\ &\quad + f_5 \cosh \delta y \cdot \sinh \delta y + f_6 \sinh \delta y \cdot \cosh \delta y \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

図 3

（二）

$$\left. \begin{aligned} f_1 &= \frac{2 \cosh \delta y \cdot \cos \delta y \cdot \cosh \delta y \cdot \cos \delta y - (\sinh \delta y \cdot \cos \delta y - \cosh \delta y \cdot \sin \delta y) (\cosh \delta y \cdot \sin \delta y + \sinh \delta y \cdot \cos \delta y)}{\sinh \delta y \cdot \cosh \delta y + \sin \delta y \cdot \cos \delta y} \\ f_2 &= \frac{2 \sinh \delta y \cdot \sin \delta y \cdot \cosh \delta y \cdot \cos \delta y - (\sinh \delta y \cdot \cos \delta y + \cosh \delta y \cdot \sin \delta y) (\cosh \delta y \cdot \sin \delta y + \sinh \delta y \cdot \cos \delta y)}{\sinh \delta y \cdot \cosh \delta y + \sin \delta y \cdot \cos \delta y} \\ f_3 &= f_1 \cosh \delta y \cdot \cos \delta y + f_2 \sinh \delta y \cdot \sin \delta y, \quad f_4 = f_1 \sinh \delta y \cdot \cos \delta y + f_2 \cosh \delta y \cdot \sin \delta y - 1 \\ f_5 &= 1 - f_1 \cosh \delta y \cdot \sin \delta y + f_2 \sinh \delta y \cdot \cos \delta y, \quad f_6 = f_1 \sinh \delta y \cdot \sin \delta y + f_2 \cosh \delta y \cdot \cos \delta y \end{aligned} \right\} \quad (6)$$

$$\text{また } \psi_1(e_1) = \psi_2(0) = f_3 / 4 \delta^3 EI_y \quad \int_0^{e_1} \psi_1(y) dy + \int_0^0 \psi_2(y) dy = 1 / 4 \delta^3 EI_y \quad (7)$$

(A) 軸力 V が作用する場合

PS 力 V は一定とみなし Fourier 級数に展開すれば $V = V \sum (4/i\pi) \sin(i\pi x/L)$ 。 V の一部 X が接觸線に沿い床版に作用し、鋼部は $V_{st} = V - X$ をうける。鋼部と版との連続条件として、接觸線位置における $(E_s)_x = (E_r)_x$ を用いると結局床版に作用する PS 力 X_v は

$$X_v = \sum \frac{2}{i\pi} X_i \sin \frac{i\pi x}{L} \quad X_i = V \frac{2t}{t + \delta f_3 \cdot n A_s} \quad n = \frac{E_s}{E_c} \quad A_s: \text{鋼部断面積} \quad t: \text{床版厚} \quad (8)$$

$$\text{床版中の圧縮力分布 } n_x \quad n_x = E_c t \sum \frac{2\pi}{L} X_i \psi_i(y) \sin \frac{i\pi x}{L} \quad (9)$$

有効幅入は、 V_{st} をうける鋼部の変形が有効幅入の合成部の変形と等しくなるように進ぶと

$$\lambda_n = n A_s \cdot x_v / t (V - X_v) \quad (10)$$

(B) 曲げをうける場合

外力による曲げモーメントを取れ、鋼部より版に作用する軸力を X_M とし、 $M = \sum M_i \sin(i\pi x/L)$ とあらわせば、結局

$$X_M = \sum \frac{2}{i\pi} X_i \sin \frac{i\pi x}{L} \quad X_i = \frac{i\pi}{2} \frac{M i \cdot s}{A^2 + r^2 + r^2 f_3 (n A_s / t)} \quad (11)$$

この場合の有効幅 λ_M は

$$\lambda_M = \frac{n A_s}{t} \cdot \frac{X_M \cdot r^2}{M i \cdot s - X_M (r^2 + A^2)} \quad (12)$$

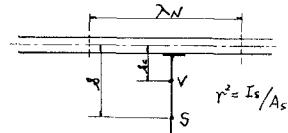


図 4

略同様の方法により、床版エニクリートの収縮、ならびにクリアアーチ影響についても解析することができる。

- * 1. 赤尾・杉本：“射張橋形式の連結合成桁について”，土木学会関西支部講演概要 昭和43年5月
- * 2. H. Beckert：“Die Voll mittragende Breite bei Plattenbalken”，Beton und Stahlbetonbau Heft 12, 1955